

# このほんしる

ねんぱん 3・4年版 No.215 しぜん・かんきょうのほん  
やま き う  
山に木を植えました

スギヤマ カナヨ／作 はたけやま しげあつ 畠山 重篤／監修（講談社）

山に木を植えると、葉  
がしげり実をつけます。  
実は次の命につながり、  
葉は落ちた後くさってふ  
ようどになります。雨が  
ふるとふようどを通過して、  
大切な養分とともに地面  
にしみていきます。そし  
て雨は川となり海にたどりつきます。

ではどんな養分がどの様にして海までとどき、海の  
生き物たちを成長させるのでしょうか？



きょうばし 京 橋 (3543) 9025  
ちゅうおうくりつ にほんばし 中央区立 日本橋 (3669) 6207 としょかん 図書館  
つきしま 月 島 (3532) 4391

●ホームページアドレス

<http://www.library.city.chuo.tokyo.jp/>

刊行物登録番号 25-059

# アンモナイトの森で もり しょうじょ ものがたり 少女チヨとヒグマの物語

市川 いちかわ 洋介 ようすけ / 作 水野 みずの ぷりん / 絵 (学研教育出版)

明治時代、北海道の山里に、チヨという女の子がいました。小さいころから山をかけまわってきたチヨは、山の動物たちと気持ちが通じるようでした。

チヨはある日、大人たちがヒグマをおそれて近づかない山おくで、たくさんのきみょうな石を見つけました。それは大昔の生き物アンモナイトの、めずらしい化石だったのです。



# 風の島へようこそ かぜ しま くりかえし つかえる エネルギー

アラン・ドラモンド / 作 まつむら ゆりこ / 訳 (福音館書店)

デンマークせい府がある島を選び、そこで使うエネルギー全てをその島でつくろうと計画しました。選ばれたのはサムス島です。

この計画のリーダーになったハーマンセン先生は、子ども達とエネルギーをつくる方法を考えました。島にいつもふいている強い

風を使えば、うまくいくかもしれません。そのためには島の人々の協力が必要でしたが…。



ななくさごや

# 七草小屋のふしぎなわすれもの

しまむら  
島村

ゆ う こ  
木綿子／作

き く ち  
菊池

き よ う こ  
恭子／絵

（国土社）

やまごやはたら  
山小屋で働きはじめた草介は、来年  
はるの春まで七草小屋をひとりできりもりす  
ることになりました。

さっそく、お客さんがやってきまし  
たが、山の中だというのに、荷物を持っ  
てないうえ、お金にはどろがついていて、  
なんだかへんなのです。実は、このお客  
さんは…。



草介と七草小屋におこるふしぎな六つのお話です。

## ふしぎなガーデン — 知りたがりやの少年と庭 —

ピーター・ブラウン／作

ちば  
千葉

し げ き  
茂樹／訳

（ブロンズ新社）

あるところに、一本も草木が生え  
ていない町がありました。人びとは家  
に引きこもっていました。しかし、リー  
アムという知りたがりやの男の子は、  
外に出て遊ぶのが大好きでした。

ある雨の日、古い鉄道の下で遊ん  
でいると、線路にあがる階段を見  
つけました。リーアムが階段をあ  
がってみると、そこにはかれかけの  
花や木がありました。



やちょう

# 野鳥もネコもすくいたい！ -小笠原のノラネコ引っこし大作戦-

おがさわら

ひ

だいさくせん

たかはし

高橋

うらら

/文

ながよし

永吉

カヨ

/絵

小笠原自然文化研究所、社団法人東京都獣医師会／監修（学研教育出版）

うつく

ひろ

しょうとう

ははじま

美しい自然が広がる小笠原諸島・母島

にある南崎で、海鳥の無残な死がい

がたくさん見つかりました。調べてみるとおそ

ったのは何と、人間がすてて野せい化した

ネコたちでした。このままでは、小笠原に

しかないめずらしい鳥たちがぜつめつし

てしまうかもしれません。鳥たちを守るた

めには、ノラネコをつかまえなければならないのですが…。



やまんどきだんろく

## 山人奇談録

ろくじょう

六条

ひとま

仁真

/著（国土社）

春休みのある日、じいちゃんにうら山

の竹林に連れだされた『あたし』。一人

でえだ拾いをしていると、友だちのマナ

があたしをよぶ声が聞こえました。声を

追いかけてどんどん山おくに入りこんで

しまったけど、マナは全然すがたを見せ

ません。この声は本当にマナの声…？

あたしが『山人』であるじいちゃんと

体験する、少しこわくて不思議な五つの

物語です。



# ゴミにすむ魚たち <sup>さかな</sup> -世の中への扉- <sup>よ</sup> <sup>なか</sup> <sup>とびら</sup>

<sup>おおつか</sup> 大塚 <sup>ゆきひこ</sup> 幸彦／文・写真（講談社）

<sup>あ</sup> 空きカン <sup>うみ</sup> を海にすてたら、<sup>み</sup> 見えなくなるけれど <sup>き</sup> 消えたわけではありません。

海に <sup>す</sup> 住む魚たちは、ゴミだらけの中をたくましく <sup>い</sup> 生きています。アイスのふくろをしきぶとんにしているカサゴ、ビールのビンをゆりかごにしているタコの <sup>あか</sup> 赤ちゃん。自分たちの <sup>じぶん</sup> 住みかや <sup>み</sup> 身を守る <sup>まも</sup> 道具として <sup>どうぐ</sup> うまく <sup>りよう</sup> 利用しています。でもこのままでいいのでしょうか？



# じいちゃんの森<sup>もり</sup> - 森おやじは生きている<sup>い</sup> -

小原<sup>こはら</sup> 麻由美<sup>まゆみ</sup> / 作 黒井<sup>くろい</sup> 健<sup>けん</sup> / 絵 (PHP 研究所)

2年生<sup>ねんせい</sup>のたいちは、ぜんそくが治<sup>なお</sup>るようにと、山<sup>やま</sup>に住むおじいちゃんの家<sup>いえ</sup>に引<sup>ひ</sup>っこして来<sup>き</sup>ました。

ぜんそくがひどくなるのがいやでとじこもっていたけれど、おじいちゃんのしつこさに負<sup>ま</sup>けて、森<sup>ま</sup>の見回<sup>みまわ</sup>りに行きました。そこで待<sup>まち</sup>っていたのは、じゅれい500年のクヌギの木<sup>き</sup>『森おやじ』でした。

